

2011年秋、第9回雲南フィールドワークの概要報告

(中国雲南省西南地域、徳宏州雲南タイ族の故郷を往く)

文責；前田栄三

1. 実施時期 ; 2011年10月27日～11月09日
2. 参加者氏名 ; L ; 岡 邦俊、SL ; 安仁屋政武、石田陽子、井上義一、上原美奈子、遠藤源太、
(敬称略) 神山 巍、田原健司、湯川有紀子、Coordinator ; 前田栄三 (全10名)
3. 文化交流担当 ; 茶道 : ティー・リテラシー¹⁾ 上原美奈子 (裏千家助教授 上原^{そうな}宗奈)
書道 : 田原健司 (田原雪峰)
4. 雲南側参加者 ; 別紙1. 「面会者リスト」を参照ください。
雲南大学民族研究院の尹紹亭教授夫妻が全行程を一緒された。
5. 主たる訪問先 ; 昆明市～大理経由～保山市～騰冲県～隴川県～凌河県～瑞麗市～芒市鎮～龍陵県
～途中、援蒋ルートの激戦地「松山(拉孟)」を遠望し黙祷～保山市～大理経由～巍山県～昆明市
6. 行程概要 ; 別紙2. 「日程&行程の概要」及び「行路」、別紙3. 「演舞等の記録」を参照ください。



7. Field Work の概要

第1日. 10月27日

各人、北京・上海・バンコク経由で昆明に到着し、阮池銀さん (Ruan Chiyin、雲南大学人類学博士課程、写真左)、董艶琴さん (Dong Yanqin、雲南大学人類学修士課程、大理白族、写真右)、林玲さん (Lin Ling、雲南師範大学日本語科OG、龍谷大学学部留学。今次FWの通訳) の空港出迎えを受け、それぞれ雲南大学賓館にチェックイン。上海経由の2人組は、21時過ぎの昆明空港到着が遅れ、空港到着後、空港ターミナルに向かうバスに乗車すべきところ、他空港行きの便に向かうバスに乗り込んだ。隣席の中国人乗客の機転で事無きを得たとのことで、23時頃ホテル着。出迎えのお二人 (写真)、ご苦労さま。



第2日. 10月28日

午前中、雲南師範大学を訪問し、茶文化と書道の交流を行う。範広融さん (Fan Guangrong、雲南師範大学日本語学部部長、副教授) の指導の下、約100名の学生・院生の参加を得た。日本側の主役は、ティー・リテラシーを自認する上原美奈子さんと建築家で書道愛好家の田原健司さん。田原さんは、「雪峰」の号を持つ。



雲南師範大学日本語科の院生・馬文瑞さん(Ma Wenrui)と学生・譚笑さん(Tan Xiao)が、日本の茶道の話(講演と実演)の通訳を務めた。

学生院生諸君には、和装の上原宗奈裏千家助教授の立居振る舞い、一挙手一投足に柔和な表情、温和な語り口が相俟って、上原さんの存在それ自体が、日本の茶の心を体現されているように映ったのではないかと感じた。老師もいたく感銘を受けたようで、その後の徳宏州梁河県南甸土司府での文化交流を手配される等、具体的な行動に反映された。北京で活躍している著名なカメラマンを土司府に招いたのもその表れである。

雲南師範大学日本語科4年生の李冰燕さん(Li Bingyan、中国茶芸師の資格を有する)が、2010年に続き中国茶芸を実演した。李さんは思茅市(現、普洱市)

出身の白族で、今回のFWの通訳も務めていただいた。黒板に掲示された「和敬清寂」の「書」は、田原雪峰さんの作品。この日、英語通訳の楊興艾(Yang Xingyi、元企業人)さんが合流した。

雲南師範大学の立派な学生食堂で昼食。午後、



雲南民族村を訪問。夜は老師のお宅に近いレストラン「富春軒」で、老師を交えて会食。



第3日. 10月29日

今日は昆明から保山市への移動日である。途中、高速道路を下りて楚雄市の楚人古鎮で昼食、保山市



に移動して、今回の旅程で最も豪華という「保山官房大酒店」泊。夜は、その名も「駝峰野菌王」と言うレストランで、艾怀森さん(Ai Huaisen、高黎貢山保護局長、雲南大学生物動物学科卒、保山市にある大学の教授になったという)と宋平さん(Song Ping、保山市事務局科長)を交えて会食。茸尽くし

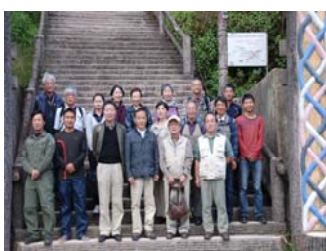
の宴(鍋料理)となり、雲南松茸の刺身を初めて食す。ふぐ刺しのようなマツタケの薄切りを生食した。食後の21時40分頃、雲南松茸を十二分に堪能した9人は酔いも手伝い老師と共に、宴会場前に横付けされたバスに一目散に乗車、私自身その後の予定のこと等とんと思ひ至ることが無かった。上原さん一人当初の予定通り、宋平さんの案内で近くにある「茶室」を訪問、宋平さんのご主人も加わり、妖艶な



雰囲気と共に得難い体験をされた由。「茶」に対するその旺盛な探究心、好奇心に脱帽である。

第4日. 10月30日

騰沖に向かう途中、高黎貢山自然公園(11:50~16:10)を訪問。公園管理事務所内の「方園飯荘」で昼食。昼食には、李家鴻さん(Li Jiahong、高黎貢山保護区保山管理局・程長)、徐標さん(Xu Biao、高黎貢山保護区保山管理局員)、他2名が同席。彼ら4人は、艾怀森さんの指示を受け、私達のために朝



から昼食の食材を採取されたそうだ。野生の雉、地鶏、木耳(きくらげ)など等、自然の食材尽くしの宴である。様々な酒瓶(薬用酒)も並んでいる。山中の茶馬古道を歩き、樹齢1000年という茶の樹に出会う。

夕方、騰沖市内の来鳳山山頂に立ち、彼我の兵士の冥福を祈る(17:55-18:50)。山腹に掘られ今も残る日本軍の塹壕を訪れ、往時を偲び慰霊したかったが、

叶わなかったことは残念であった。「盈香園庁」と言う名の薄暗く騒々しいレストランで夕食。張海乾さん（Zhang Haiqian）が同席。彼と老師とは、父親同士が西安国民党軍の仲間といい、張さん自身は保山師範大学を卒業後、ミャンマーの共産党軍に加入したという経歴を持つ。騰沖の地も漢族資本による観光開発（道路とリゾート施設開発）が盛んである。

第5日．10月31日

国殇墓園(09:30-10:45)、火山飛瀑(11:00-11:30)を訪問、漢族の文化生態村で知られ華僑の故郷で有名な「和順郷」(古鎮)を歩き、茶馬古道博物館を見る。その後、熱海温泉を訪問し、入浴組と散策組に分かれて休息(16:20~19:30)。夕食後、希望者は老師の引率で「足つぼマッサージ」へ行く(21:40-23:50)。騰沖は古来より交通の要衝として知られ、軍事上極めて重要な地点である。中国各王朝はこの地に重歩兵を駐留させ、チベット・ミャンマーに対する備えとしたという。

「1944年5月10日、中国遠征軍は、雲南省西部地区で活動している旧日本侵略軍を反撃し、長い戦闘を経て9月14日に騰沖県を取り戻した。この戦争で犠牲になった中国遠征軍の将軍・兵士を記念するため、「国殇墓園」が建てられた」(「」内；China Radio Internationalの記事より)。今回の訪問では、墓園の一面に新たな追悼施設が建立されている様子を眼にした。騰沖・松山・龍陵の戦闘の様子が、それぞれ新しい大きな石碑に刻まれていた。全ての石碑に「戦闘は凄惨を極めた」旨、刻まれている。

第6日．11月1日

騰沖のホテル「愛麗酒店」を出発、街中の食堂で朝食(麵食)後、梁河県に移動。梁河県は、老師の故郷である。老師のご先祖は、明軍による



「隴川三征」の折、2000人の兵を率いて従軍し、そのまま雲南に留まったという²⁾。梁河県南甸土司府の奥の一角に、老師の祖父・尹明德氏の業績を讃える資料室があった。尹明德氏は、国务院総理・周恩来の片腕(現地責任者)として、ミャンマーとの国境策定に力を発揮したという。



梁河県南甸土司府内で、青年男女3人によるひょうたん笛の演奏があり、雲南を代表するチベット族の歌曲が奏で



られた。日本から持参の茶が点てられ、書が披露され交歓された。ちょっとした文化交流である。北京で活躍する著名なカメラマン・尹紹平さんも同席し、彼我の交流の様子を盛んに撮影していた。尹紹平さんは老師の従兄である。その作品は、2012年3~4月頃に雲南電網(Website)に公表されるという。



「土司苑」という名の平屋の宴会場で三卓を囲み、賑やかな会食となった(12:30-14:00)。張(Zhang)さん(徳宏州梁河県文体広電旅遊局局長)、楊永清さん(徳宏州梁河県書画協会副会長)、賓元壽さん(徳宏州梁河県書画協会)、莫建凌さん(梁河県旅遊景观点管理局局長)、楊常権さん(中国共産党梁河県委宣



伝部)達が卓を囲み、給仕の若い女性達が恥じらいながらも和やかに歌唱を披露してくれた。



その後、隴川に移動してホテル「泰达大酒店」に到着。1時間休憩した後、チンポー族の村を訪問し展示施設を見る（18:05-18:25）。

隴川・麓川は、麗しきタイ族の王国「大モンマウ王国」の中心地域であった。霧立ち込める瑞丽江のほとりを、タイ族は「モンマウ」と呼んだ。

地名の「マウ」はタイ語で霧立ち込める様、「モン」は国の意味である³⁾。



第7日. 11月2日

今日は隴川～瑞麗への移動日。勐卯の（モンマウ王国の）歴史遺跡、タイ族の村を訪問する日である。|

隴川ホテル「泰达大酒店」を出発、瑞丽江の深い霧の立ち込める中を1時間15分



程して瑞麗ホテル「勝隆大酒店」に到着し、荷物をホテルにデポして、タイ族の村そして喊撒奘寺を訪問した。お寺に隣接する平屋の建物内では結婚式&披露宴が行われていた。ミャンマーとの国境の村（一寨两国）を訪問し、国境管理事務所を視察。昼食は、暖波飯店の池に張り出した開放的な一室で摂った。



今回の旅で初めて歌唱が飛び交い老師の奥様も涼やかな声で日本の唱歌を披露された（13:20-15:40）。タイ族の村そして等喊弄奘寺を訪問、竹壁民家を視察した（16:00-17:00）。移動の途中、村祭り会場を訪れ祭の雰囲気味わう。

第8日. 11月3日



ミャンマー国境の街を視察、翡翠で賑わう辺境の市場を視察、手持無沙汰な顔をした無数の男たちの視線が不気味である。ミャンマー料理店で昼食。莫里熱帯雨林公園を散策した（14:20-16:30）。



夕食は、瑞丽江（写真）の支流添いの弄坎江魚飯店と言う名のレストランで魚尽くしの宴となった（17:15-18:55）。生け簀の魚は、今獲ってきたばかりのような元気さながら、手慣れた女性の手捌きは実に見事である。



ある。国境の街の夜は危険が一杯、街路樹が繁茂し街灯も暗く不気味である。

第9日. 11月4日

瑞麗から芒市鎮への移動日である。途中、遮放南見タイ族生態村を訪問、民族文化を体験した。芒市には、かつて日本陸軍（ビルマ方面軍）の師団司令部が置かれていた。前線に龍陵、騰沖、松山（拉孟）等がある。途中の三台山一帯は、龍陵・芒市から敗走する日本軍が最後の戦を試みた地域であった。

南見村は、老師夫人が20歳の頃、1年ほど下放されたという村で、私達もご夫妻と一緒に当時住んでいたお宅を訪問、奥さん（帽子の人）は一家の皆さんと旧交を大いに暖めていた。昼食は、村長の周波月減凹さん（Zhoubo Yuejian、芒市遮放南見村民小組）、元・村の書記だった金莫栓さん（Jin Moshuan）を交え賑やかな集いとなった。芸能・歌唱自慢の女性からは、タイ族の歌を次々に披露していただいた（12:05-15:20）。



この日は、三台山の山上にあるトーアン族の村を訪問し、トーアン族のお茶の文化を体験する予定であったが、バスで山道を走るのは無理…との判断が示され、遺憾ながら中止となった。村への登り口にあるトーアン（徳昂）族博物館を視察した。現場の状況に即応した対応（小型車の手配等）を望みたい。夕食後、希望者はお茶の店「閑得閣」へ行き、茶文化を体験したという（21:30-22:40）。

第10日. 11月5日

この日は、龍陵、松山、保山を経て大理へ移動する予定であった。甚だ遺憾なことながら前夜、「11月

1日より、外国人の松山戦跡訪問は事前許可制となった」旨、老師より知らされた。龍陵県当局の指示といい、事の真偽は不明であるが、松山への分岐点では急ごしらえの公安のチェックが為されていた。

龍陵抗日戦争記念館は休日のため休館、団長の発声で、記念広場で彼我の戦死者に黙祷を捧げた。保山への移動の途中、高速道路の脇の「松山」を遠望できる地点に展望広場があり、「松山戦跡記念碑」が建立されていた。下車して、遥かに黙祷を捧げる。

保山博物館を視察、館内には日中両軍の雲南戦

战役名称	作仗时间	日军伤亡	我军伤亡	对比
渡江攻击战	1944.5.1-6.21	605人	1986人	1:3.28
腾冲围歼战	1944.6.22-9.14	3075人	18236人	1:5.93
松山攻坚战	1944.6.24-9.7	1280人	7600人	1:5.94
平达、象达侧翼战	1944.5.11-9.22	523人	802人	1:1.53
龙陵争夺战	1944.6.5-11.3	10620人	28384人	1:2.67
芒市、畹町追歼战	1944.11.13-45.1.20	4954人	10645人	1:2.1
合计	1944.5.11-45.1.20	21057人	67430人	1:3.2

線の様子が克明に展示されていた。展示されている「表」の「对比」欄をご覧いただきたい。

騰冲（1：5.93）、松山（1：5.94）、龍陵争奪戦（1：2.67）とある。日本兵の戦死者1名に対する中国側（雲南遠征軍）兵士の損害の甚大さが、一目瞭然である。その戦いぶり（鬼神も啼く敢闘ぶり）が我が国の公刊戦史ばかりでなく米国の公刊戦史にも記録されている⁴⁾ 他、「蒋介石の逆感状⁵⁾」として今もなお有名な『日本軍守備隊の勇戦奮闘ぶり』を、余すことなく表していると言えましょう。

保山市の博物館の近くで昼食後、龍波さん（雲南大学生命科学院講師）に偶然出会う。彼女は今回の旅の日本語通訳候補だったが、新人研修の一環で、保山師範学院に副郷長として1年間、派遣中の身となった。老師によれば、新農村建設の目的で、年に10～10数人が雲南大学から派遣されるという。

大理古城内のホテル「蘭林閣酒店」に宿泊、夕食後、9人が大理白族の演舞を觀賞する。

第11日、11月6日

午前中は大理三塔の観光、大理古城内の散策等、自由に行動。

14時、大理ホテル「蘭林閣酒店」を出発、16時には巍山ホテル「藍龍花園酒店」にチェックイン。偶々「巍山県55周年祭(イ族)」が行われており、早速視察に出かけるも終了直後であった。夕食後、巍山古城の城楼上で南詔古楽器演奏団の道教古歌の演奏を鑑賞し、交歓した(20:00-21:00)。



第12日、11月7日



ホテルの隣にある藍染工場を歩いて訪問し、操業前の様子を視察。街の食堂で朝食に麺を食べ、55周年会場で少年少女数グループの踊りを觀賞の後、巍山を出発し昆明に戻る。夕食後、昆明映像を訪れ楊麗萍の孔雀の舞その他の演舞を觀賞する(19:45-22:00)。何回見ても感動する。



巍山は、大理（下関）の南約60kmの地点にある南詔国発祥の地である。巍山古城は、明朝時代の1389年の築造という。

第13日、11月8日

早朝、2名は上海に移動。中国法曹関係者との面談等のためである。8名は午前中自由行動、内7人は「花鳥広場」という名のショッピングセンター（土産物屋街）へ行く。バイキングスタイルの昼食の後、雲南農業大学(茶学院)を訪問、お茶と書の交流を行う(14:40-17:25)。昼食時に老師の友人・蔣大康さんが



合流し、以後行動を共にする。蔣大康さんは、著名な書家で指墨画家といい、指墨作品集を記念にいただく。交流の場でも、書と指墨絵を披露された。右の写真は、蔣さんの書と指墨絵の作品を扱ったカタログを撮影したものである。



交流会場には 100 人近い学生院生が集まっていて、「熱烈歓迎日本—雲南懇話会一行」と書かれた横断幕が掲げられ、茶学院の男女の茶芸本科生による踊りと歌と音楽が披露された。



雲南農業大学内の「茶苑」で、交歓夕食会が開かれた (18:00-19:30)。日本側主催の老師・3 人の通訳・運転手との Farewell party でもある。雲南農業大学副学長で党委副書記の李永勤 (Li Yongqin)



さんご夫妻他が参加された。



記念写真中央の赤いストールの女性は、雲南農業大学龍潤普洱茶学院&雲南普洱茶研究院院長の邵宛芳さん、その右にティー・リテラシー上原美奈子さん（裏千家助教授、上原宗奈）、そして書道家で山スキーヤーの田原健司さん、文化交流の日本側の主役の二人です。前列左端に雲南大学の尹紹亭さん（民族研究院教授）、右端から 3 人目が雲南懇話会代表の安仁屋政武さん（筑波大学名誉教授）。後列左端から 4 人目が蔣大康さん。

尹紹亭さんには、4年連続して雲南省内を案内していただいています。踊り手は全員、雲南農業大学茶学院の学生。 集合(記念)写真の撮影者は、雲南農業大学茶学院茶芸本科生3年級、周 莹さん。

第14日. 11月9日

ホテルのチェックアウトを以って解散。お疲れさまでした。

董艳琴さん (Dong Yanqin、雲南大学修士課程、大理白族、写真; 昼過ぎの昆明空港にて) には、早朝から見送りしていただいた。Dongさん、ありがとう!

以上



あとがき

時間記録は井上義一さんに担当いただいた。その精緻な記録が当時を思い起こす基となり、この概要書作成の源になった。記して深謝したい。

写真記録は遠藤源太さんに担当いただいた。これに各人から提供された写真と日々の時間記録を加えて、井上さんの手により全体編集された。行動記録は、遠藤源太さんと神山巍さんにより纏められている。

なお、遠藤源太さんの観光・演舞観賞の行動記録&写真記録は、本「概要書」に添付してあります。

写真記録(遠藤源太さん撮影分を中心に、井上義一さん編集)と神山さん作成の行動記録、そして石田陽子さんと湯川有紀子さんによる「食の記録」は、別途、雲南懇話会 HP に収納する予定です。

面会者リストの「中文及び英文表示」については、遠藤源太さんにより吟味・作成いただいた。

安仁屋政武さんにより作成された「行路図」も、添付してあります。

今回のフィールドワークを通しての「お茶」に関する論考は、別途、上原美奈子さんにより纏められる予定です。

参考文献など

1. ティ リテラシー; 上原美奈子さんの造語です。以下、上原さんのブログから転載します。

『Tea-literacy とは不易流行を学ぶ守な茶道のお稽古あり、日本中の、世界中のお茶とお菓子を楽しんじゃうわくわくなお茶会あり、茶摘みや製茶に出かける農な遠足あり、明日は何をしているかわからないけど、今日が楽しいのも、明日が楽しみなのも、お茶に出会ったから。 tea-literacy はお茶の語りうること、tea-literacy はお茶の可能性。』 <http://www.tea-l.com> をご覧ください。

2. 京都大学東南アジア研究センター、1997年「東南アジア研究 Vol.35 No.3」p362

3. 古島琴子「雲南タイ族の世界」創土社、p31

4. 古山高麗雄「龍陵会戦」文春文庫、p359~360

5. 後 勝「ビルマ戦記」光人社、p139~140

第9回雲南フィールドワーク面会者リスト

2011年10月27日～11月09日

1. 10月27日

- ・ 阮池银 (Ruan Chiyin) ; 雲南大学、Ecological Anthropology、生態人類学博士課程。空港出迎え。
- ・ 董艳琴 (Dong Yanqin) ; 雲南大学、Ecological Anthropology、修士課程、大理白族。空港出迎え。
- ・ 林 玲 (Lin Ling) ; 雲南師範大学日本語科OG。今次FWの通訳。 空港出迎え。

2. 10月28日

- ・ 顔 寧 (Yan Ning) ; 雲南師範大学 (英文学・人類学) 教授、老師の学生だった。昼食始めのみ同席。
- ・ 範広融 (Fan Guangrong) ; 雲南師範大学 (日本語学部) 部長、准教授
- ・ 馬文瑞 (Ma Wenrui) ; 茶道の話の通訳
- ・ 譚 笑 (Tan Xiao) ; 茶道の話の通訳
- ・ 李冰燕 (Li Bingyan) ; 雲南師範大学日本語科4年生 (茶芸を実演、今次FWの通訳)
- ・ 楊興艾 (Yang Xingyi) ; 第3の通訳 (英語)
- ・ 段啓雲 (Duan Qiyun) ; 応援の女子学生

3. 10月29日

- ・ 艾怀森 (Ai Huaisen) ; 高黎貢山保護局長、雲南大学生物動物学科卒、教授になったという。
- ・ 宋 平 (Song Ping) ; 保山市商務局科長

4. 10月30日

- ・ 李家鴻 (Li Jiahong) ; 高黎貢山保護区保山管理局・程長
- ・ 徐 標 (Xu Biao) ; 高黎貢山保護区保山管理局 他2名。
- ・ 張海乾 (Zhang Haiqian) ; 老師とは父親同士が西安国民党軍仲間。保山師範大学を卒業、ミャンマーの共産党軍に加入した。

5. 11月1日、

- ・ 尹紹平 (Yin Shaohing) ; 北京在住の記者、著名撮影家、老師の従兄
- ・ 張 ？ (Zhang) ; 雲南徳宏州梁河県文体広電旅遊局局長 (1字不詳)
- ・ 楊永清 (Yang Yongqing) ; 雲南徳宏州梁河県書画協会副会長
- ・ 賓元壽 (Bao Yuanshou) ; 雲南徳宏州梁河県書画協会
- ・ 莫建凌 (Mo Jianling) ; 雲南梁河県旅遊景点管理局局長
- ・ 崔忠田 (Cui Zhongtian) ; 雲南梁河県
- ・ 楊常權 (Yang Changquan) ; 中共梁河県委宣伝部

6. 11月4日

- ・ 周波月減凹 (Zhoubo Yuejian) ; 芒市遮放南見村民小組、村長
- ・ 金莫栓 (Jin Moshuan) ; 元・村書記

7. 11月5日、 龍 波 (Long Bo) ; 雲南大学生命科学院講師、保山で昼食後に偶然出会う。

保山師範学院に副郷長として1年間、派遣中。

8. 11月8日

- ・ 李永勤 (Li Yongqin) ; 党委副書記、雲南農業大学副学長、奥様 (茶道の交流、party とも) 参加。
- ・ 邵宛芳 (Shao Wanfang) ; 雲南農業大学龍潤普洱茶学院/ 雲南普洱茶研究院、院長
- ・ 李家華 (Li Jiahua) ; 雲南農業大学茶学院副教授、鹿児島大学に6年留学経験あり。
- ・ 吳芹謠 (Wu Qinyao) ; 雲南農業大学茶学院茶芸本科生4年級 (2010年、雲南の茶道を実演)
- ・ 周 莹 (Zhou Ying) ; 雲南農業大学茶学院茶芸本科生3年級
- ・ 呂 栢 (Lu Caiyou) ; 雲南農業大学茶学院茶芸本科生
- ・ 蔣大康 ; 尹紹亭老師の友人、著名な書家、指墨画家

以上

日程 & 行程の概要
2011年10月27日～11月9日

- 10月27日： 全員、昆明に到着。 宿泊：雲南大学ホテル
- 10月28日： (昆明) 午前：雲南師範大学（呈貢キャンパス）を訪問。師範大学でお茶の文化について、講演と茶道の実演を行う。午後：滇池の湖畔にあるテーマパーク「雲南民族村」を視察。 宿泊：雲南大学ホテル
- 10月29日： 昆明～保山。 夜：茶室を見学する。 宿泊：保山市官房大酒店
- 10月30日： 保山～騰冲。途中、高黎貢山森林公園・茶馬古道を歩く。夕方、来鳳山山頂に立つ。 宿泊：愛麗酒店
- 10月31日： (騰冲) 午前：国殇墓園、叠水川滝（叠水河瀑布）訪問。午後：和順漢族の村（古代の民居と茶馬古道博物館）を訪問、熱海温泉へ行く。 宿泊：愛麗酒店
- 11月01日： 騰冲～隴川。途中梁河県南甸土司府で文化交流、盈江旧城タイ族の老街、隴川チンポー族の村を視察。 宿泊：隴川泰達ホテル（隴川泰達酒店）
- 11月02日： 隴川～瑞麗。勐卯の（モンマウ王国の）歴史遺跡、タイ族の村を訪問する。 宿泊：瑞麗騰隆酒店
- 11月03日： (瑞麗) 中国とミャンマーの辺境街を視察、辺境貿易・免税店など視察。莫里熱帯雨林公園訪問、2時間ほど散策。 宿泊：瑞麗騰隆酒店
- 11月04日： 瑞麗～芒市。途中、遮放南見タイ族村を訪問し交歓、民族文化を体験する。（三台山トーアン族の村を訪問し、トーアン族のお茶の文化を体験。）・・・中止
徳昂族博物館視察、お茶の店「閑得閣」訪問。 宿泊：芒市海洲酒店
- 11月05日： 芒市～大理。途中、龍陵抗日戦争記念公園内にて黙祷。保山市博物館視察。（松山（拉孟）戦跡にて慰霊。怒江に架かる恵通橋を視察。）・・・当局の事由にて中止
夜：大理ペイ族の演舞を觀賞する。 宿泊：大理蘭林閣酒店
- 11月06日： 大理～巍山。大理古城・大理三塔、巍山古城を視察。巍山古城・城楼にて南詔古楽器演奏団の演奏を鑑賞。 宿泊：巍山藍龍花園酒店
- 11月07日： 午前：巍山古城などを観光、「巍山県55周年祭」の踊りを觀賞。午後：昆明に戻る。
夜、昆明映像で楊麗萍の孔雀の舞、その他の演舞を觀賞。 宿泊：雲南大学ホテル
- 11月08日： 午前； 自由行動、希望者は花鳥広場でショッピング。 午後；雲南農業大学茶学院を訪問、お茶の文化や茶道について交流する。夜、同大学内の茶苑で Farewell party。 宿泊：雲南大学ホテル
- 11月09日： 昆明にて解散。

1. 日 時： 2011 年 10 月 28 日午後
2. 場 所： 雲南省昆明市西山区滇池路 昆明滇池国家旅游度假区
3. 入場料： 90 元/人 60 歳以上割引 電動カート貸し切り：1 輛 200 元

(1) はじめに

私はこれまで、主として中国北西部から東北部にかけて各地を旅してきたが、西南部へは足を踏み入れたことがなかった。今回、雲南懇話会による当計画に接し、参加させていただくこととなった。フィールドワークの報告では、この雲南民族村と騰冲地熱公園の参観、大理での望夫雲の観劇を担当した。

(2) 雲南民族村の概要

雲南民族村は昆明市の南方 8 km の滇池北岸に位置する、1992 年にオープンした国家 AAAA 級旅游景区である。約 80 万 m² の広大な敷地内に、雲南省内に居住する 25 の少数民族すべての、それぞれの文化を実物で紹介するテーマパーク。博物館ではないためか、説明キャプションは少ない。

家屋や宗教施設を中心に、民族毎のゾーンで区切り展示している。そこで働く人々もまた各地からやって来た実際の少数民族で、民族衣装を身にまとい、各自の民族文化を紹介するいわゆるコンパニオンである。民族によっては地酒を飲むこともできるし、歌や踊りの公演スケジュールが組まれていて楽しむことができる。 営業時間は午前 8 時から夜 10 時まで。



(3) 参観記

当初は犬山の野外民族博物館リトルワールドや、民家園の大きいものと一緒で、実在の村々を訪問するような生活感あふれるリアリティは期待できないな、とのイメージを持って入場した。入るとすぐに平面図の案内板があるが、どう回ればよいのやら。結局、電動カートに乗って参観することになった。

この先は様々な民族ゾーンを参観したものの、これといった強い印象は残っていない。あえていえば、民族衣装を着た娘さんたちの笑顔の美しさであろうか。顔つきからはどの民族かの見分けはつかない。外見の服装が、特に色彩がまったく違うこと、家屋も少し違うかなと感じたことくらいか。これが民族学者なら一見ただけで解るのだろうなと思いつつ見学した。ましてや、食事や農耕、婚姻や祭りなどのおこない方、つまり時間軸を通してしか見えない内面的な部分は感じ取れなかった。

各ゾーンに設置されている案内板は、内容があまりにも簡単すぎると感じた。反面、出口にあった、西山の姿に刈り込まれたガジュマルの大木は、一見の価値がある。

1. 日 時： 2011年10月31日午後
2. 場 所： 雲南省騰冲熱海国家重点風景名勝区 騰冲火山地熱国家地質公園
3. 入場料： 60元/人 60歳以上無料

(1) はじめに

旅日程では温泉で入浴となっていたが、日本式の入浴法でなく海水パンツ着用というのは風情もなにもない。私ははじめからパスして、地熱公園の参観を選んだ。

温泉入浴組も当コースを歩いているのだが、夕方で薄暗くなり景観がよく見えなかったとのことで、この点に配慮して報告する。

(2) 熱海地熱公園の概要

雲南省西部はインドプレートとアジアプレートがぶつかり合うところで、地殻変動が激しく、有名な横断山脈以外にも数多くの火山と断層がある。中でも騰冲周辺は中国三大地熱地域の一つであり、同時に水資源が豊富なために多くの温泉が湧く地域でもある。騰冲から西南部の熱海は最も有名で、8km²の熱海地熱公園として整備されている。園内にはホテル、スパ、温泉湧出口をめぐる遊歩道があり、一部はまだ整備工事中だった。



(3) 参観記

遊歩道のゲートで入場料を払うのだが、私の場合はパスポートを提示。60歳を超えているために無料だった。道はゆっくりとした登りで、やがて東屋とともに温泉の白い湯気が見えてくる。そこは大滾鍋 (Dagunguo) と名づけられた直径6メートルほどの大きな温泉湧出口だった。中国語で“大きな沸騰する鍋”の意で、摂氏96度にもなる透明な湯がまさにぐらぐらと煮えたぎっていた。

さらに上部に登ると岩壁でさえぎられ道は行き止まりである。岩壁最下部の、堆積物と接する所の全縁から、少量ながらとても熱い温泉がシュッシュッと断続的に噴き出していた。岩壁から下に続く斜面上には小さな窪みがいくつもあり、茶灰色のお湯がポコッポコッと気泡と共に滲み出ている。幾人かが足湯をしていたので、私も試してみた。ぬるいもの、熱いものがあり、ちょうど良い湯加減のところで腰を下ろし、しばし地形を観察しつつ足湯を楽しむ。底の粘土状が泥パックのようで気持ちよい。

岩壁は熱で変色し、かなり風化していた。これと大滾鍋の間は、ぽろぽろと風化したいくつかの岩体と、上部からの堆積物が混じった土・粘土混じりの斜面となっている。おそらく地下の構造も脆くなっていて、この弱いところに沿って、地下から熱水が上昇してきているように見えた。

林玲と冰燕はどこで入手したのか、藁縄で縛った生卵を持ってきていた。岩壁下部の一番熱いところで、はしゃぎながら温泉卵づくりに挑戦していた。茹で上がった卵を尹教授夫人ともどもいただく。“好吃！”の一言。これ以外に形容する言葉はない。

その後、遊歩道は大滾鍋のところから右岸の尾根に上がり右方向へとトラバースする。やがて視界が開け谷を見下ろす所から下りになる。かなりの急斜面で階段が延々と続いていて、すり鉢状の谷底には

蒸気が立ち上がっているのが見える。道は幾つかの温泉湧出口を巡るように付けられていて、それぞれ「怀胎井」「鼓鸣泉」「珍珠泉」「眼镜泉」など中国人の想像力の賜物か、曰くありげな名前が付けられている。中に、時おり泉底から丸い気泡がゆっくりと立ち昇り、その微妙なゆらぎが光を反射して、まるで真珠が浮かびあがるかのように見える泉もあった。また、一箇所だけ鉄分を含む赤い泉があったが大半の色は透明だった。湯温は地表部でも 100 度近い熱湯なのだが、透明なためか熱さを感じさせないどころか、ペット水のようにそのまま飲めそうだった。一体、地下深部では何度あるのだろうか。

降りきった谷底には、褐色に濁ってはいるものの水量豊かな溪流が流れていた。木道がゴルジェ状の溪流を遡るように付けられている。そこを抜けると地形が開けて、やや先には滝がかかっていた。滝壺の左岸には蛙が上に向かって鳴いているかのような形の岩があり、口とおぼしき場所から蒸気と間欠泉がシュッ、シュー、シュポポと騒がしく、勢いよく噴き出している。その名も「蛤蟆嘴(Hamazui ガマガエルの口の意)」という。最初に見た大滾鍋と、この蛤蟆嘴の湧出口は見た目と名前が一致していて、日本人にもわかりやすい。

林玲曰く、このあたりは数年前に大爆発して大変だったとのこと。周囲を見ると、対岸の右岸は礫まじりの低い段丘崖だが、左岸はローム層のような土の高い崖で、半円状にえぐれているようにも見えた。思うに、大滾鍋上部で見た岩壁付近と同じ様な地質構造で、ここでは水流がもろい箇所を浸食して段差(滝)ができ、同様に地下深部からの熱水も上昇しやすく、地下の地熱活動が活発となったある時期に、水蒸気爆発が起こったのではないだろうか。とすれば、まさに爆裂口にいるわけである。いつ再爆発するか判らない。なんとも恐ろしい場所を観光地化したものと感心する。

そこでは、泥だらけになった作業員が土留めの工事中だった。しかし、フレキシブルチューブから凝固剤のようなものを斜面に吹き付けてはいるが、肝心の基礎杭や鉄筋、金網等はまったく見当たらない。これが例のオカラ工法か？目が点になった。この先、道は平凡になり、やがて出発点の駐車場に着いた。

以上

別紙 3-3

大理、奇夷之大理 — 望夫雲 観劇

文責；遠藤源太

1. 日時： 2011年11月5日19時40分～21時15分・20時開演
2. 場所： 雲南省大理市大理古城洪武路（北段） 大理之眼・夢幻大劇場
3. 入場料： 300元/人 貴賓席

(1) はじめに

大理市は以前から注目していた場所だけに、期待して臨んだ。行って、実際に見た印象は想像以上で、高山を間近に仰ぎ、眼下に広大な湖、洱海を望み、旧市街には豊かにかつ透明な用水が流れている。中国では初めて見る美しい景観だった。劇場は古城内にありホテルから間近。夕食を早々にすませて歩いて行った。席は中央の F ゾーンでよい席だった。座席そのものは指定がなく自由だった。



(2) 望夫雲 作品と舞台設備

大理・白族の人々に古くから伝わる悲しくも美しい伝説をもとに、映画「霸王別姫」で知られる世界的演出家の陳凱歌が自ら脚本を書き演出した、全六幕の舞踏劇である。作曲は日本の久石譲が、歌は劉歡が、王兵が音楽プロデュースを、舞台美術は映画「梅蘭芳」を担当した柳青が、舞踏演出は北京現代舞団創作総監督の高艶津子が、そうそうたる顔ぶれが関わった大作といえる。

舞台は蒼山を借景した屋外型の巨大なもので、面積は約4万4千坪、幅223m高さ33mのアーチがステージ上にかかり映像、色彩、噴霧などの演出を行える。縦・横移動や回転や昇降の装置、火炎噴射装置などの演出設備を備え、アジア最大とのこと。ただし、野外劇場のため、屋根はスタンド最上部にのみかかっているにすぎない。

今回の夜の公演では借景しているはずのバックステージの山、つまり劇中の本当の舞台である蒼山は闇の中で見えない。昼の公演の場合は色彩にかかわる照明演出や映像演出は効果が出ないと思われるが、いったいどのように対処しているのか、公演は夜だけなのか、興味のあるところだ。また、市街地に立地しているのだが、あの音量である。近隣対策についても興味があった。



(3) 望夫雲 その白族伝説・・・公演プログラムから直訳する

大理蒼山には19もの峰があり、その一つが玉局峰だ。毎年冬が来るたびに、万里にわたる雲なき晴天の中、突然、玉局峰上に一片の、銀のように輝き、雪にも似た白雲が出現する。それはすがすがしく美しく、優美かつ軽やかで、真っ青な空にあってひととき目立つ。不意に、それはなんと次第に黒く変色しつつ、ますます高みへと上昇し、ながく、ながく伸びて来る。その姿は物静かな美しい女性にも似ていて、髪を振り乱し、黒い喪服をはおり、満々とした洱海を見下ろし泣き叫んでいるかのようだ。

伝え聞くとところによると、これは南詔公主(公主は王女の意)の化身で、彼女は蒼山の若い狩人と愛し合っていたが、大將軍の横槍により愛を奪われ、狩人を殺されてしまう。狩人は洱海に沈んで湖底で石の驪馬に変わり、公主も愛ゆえに命を絶ち、一片の白雲となった。彼女の想いは風を巻き起こし、湖水を吹き開き、湖底の夫に会おうとしているのだ。このようなことから、後の人はこの雲を…望夫雲と呼びなした。

…望夫雲が消え去ると、洱海の風はおさまり波も静まる。これは公主がすでに夫に会えたからだ。別の状況、すなわち荒れ狂う大風の時は、風雨が入り混じり稲妻の閃光と雷鳴がとどろく。この現象は長い時間続いたのちによりやくおさまる。ある人が言うには、これは公主がいまだ夫に会うことができないことで、怒りがやまなかつたためなのだ。

………

当然、望夫雲は空気が高速で動くことで出現するもので、それは蒼山と洱海の特異な地理的な位置関係に起因している。しかし昔から人々は、かくのごとく人々を感動させる伝説となし、望夫雲をして興味深く、かつ不思議なものとした。

(4) 望夫雲 観劇レポート

視之不見，名曰夷

听之不闻，名曰希

………

中华文化源远流长，彩云之南魅力无限。

今天我们以大理白族民间浪漫爱情故事《望夫云》……

このようなアナウンスで舞台が開く。

全六幕のドラマは壮大で、演出は概ねテンポ良く、時を忘れさせるものだった。ただ舞踏劇のためか、どうしてもドラマの展開上、重要かつ説明的な部分は解りづらく、冗長に感じる時がなかったとはいえない。すでにストーリーもわかっている劇の鑑賞とは違い、今回初めて見る内容だし、望夫雲伝説そのものも初めて知ったものだけに止むを得ないだろう。

ステージは大きく三列に分かれていて、曲線の最前列、直線の第二列、広い最後列があり、左側には蒼山に見立てた一段と高いステージがある。ステージの上には冒頭紹介したアーチが架かり、特に左側の高いステージの上にあたる壁面は映像スクリーンとして利用されていた。三つのステージの間には洱海を表わす水が張られていて、軍船の来襲やラストシーンに使われ、舞台の照明や火炎の演出が映えて、美しく効果的だった。ただ、あまりにも広く遠いステージであり、演者の表情、衣装や小道具のディテールがよく見えない。特に後列での演技は遠すぎて、オペラグラスがないとまったく解らず、私の場合は主として前列に注目して楽しんだ。

出演者数も日本では考えられないくらい多い。しかしソリストは数名で、他は村人や女官、軍隊の兵士だった。衣装、小道具もそれほど多種多様ではなかったと記憶している。しかし、たとえこれに凝ったとしても、遠すぎて見えないので意味はないと思う。個々の個性的な演技や大道具、小道具の気配りよりも、マス全体としての動きや雰囲気重点を置いたのか。杭州にも類似の屋外大型施設があるが、現代中国の舞台演出の潮流なのか。ふと2008年の北京オリンピックの開幕式を思い出した。

踊りはプリマ役をはじめ、ソリスト達はすばらしかった。反面、その他大勢の動きは統一性に欠けていたが、これも大型舞台かつ多人数ゆえの問題かもしれない。標高2,000mの大理。かつ11月の観劇という今回、吹き降ろしの山風はたいへん冷たく、震えながらの観劇だった。

これが、あの…望夫雲のもたらした風…だったのだろうか。

(5) 望夫雲 第六幕 化雲（雲と化す）

感動的な終幕を公演プログラムから直訳して、本報告を締めくくりたい。

前幕で大將軍に殺された狩人は、蒼山の神の神力によってよみがえり、公主と結ばれる。その幸せのさなか、再び大將軍に殺されてしまった。

第六幕はそののちのストーリーである。

心が大きく動揺している南詔公主、夫の死という現実を受け入れるしかないのだが、蒼山の神に向かい、気が狂ったように夫をもう一度生き返らせてほしいと、ひたすら嘆願する。善良な村人たちも、愛する人との永遠の別れを目のあたりにして、次々と集まり、この不運な夫婦のために蒼山の神に祈りをささげた。

神は手の施しようがなく、狩人を再びよみがえらす方法もない。唯一できることは、狩人を三分間のみ生き返らすことだけだった。しかし代償として、公主は命をささげ天空の一片の雲にならなければならない。この、神の話を聞き終えた後、公主は静かにうなずきすべてを受け入れた。ひとときの後、公主は顔をあげ涙を拭いつつ微笑みを浮かべ、立ち上がり衣装を整えて、しっかりとした足どりで夫のもとへ向かった。そして身をかがめ、深い愛情をこめて夫を呼び起こす。

公主はついに命をさしだした。自ら選択した、再び夫と愛し合える最後の、三分の時間。愛し合う二人の心は、この短い時間をも止めたかのようにだった。数多くの美しい思い出がよみがえる。……… 三分間は瞬く間に過ぎ去り、つらい現実は変えようがない。狩人はゆっくりと、ゆっくりと洱海の深部へと沈んでゆき、石驪馬に化した。公主もまた、花が散るかのごとく静かに、静かに上空へと昇華してゆき、天空で、あの…望夫雲となった。

………

人生は苦しく短い。人々は出会い、愛し合う。しかし時が経つにつれて、どれほどの愛が悄然として変質し、消え去るのか。もし本当の愛が三分だけでも有ったならば、それこそ千年もの長いあいだ語り継がれる美しい話と、なるにちがいない。

雲南省西部タイ族地域訪問ルート 2011年10月27日～11月9日

